札幌市衛研年報　19，71－73（1992）

1991～1992年の札幌市における インフルエンザの流行について

吉田　靖宏　　本間　真紀　　島尻　直美　　原田　　良*
大森　　茂　　清水　良夫　　菊地由生子

要　旨

札幌市における今季のインフルエンザの流行は昨年同様例年より遅く，1991年2月にはいってからであった。Aソ連型ウイルスが流行の主流となり短期間に終焉した。3月に入りA香港型が少ないながら分離された。この傾向は全国的に同様で，流行規模は比較的小さかった。

1．緒　　言

札幌市におけるインフルエンザウイルス分離検査は，従来実施してきた内科1定点に加えて，昨年度からは感染症サーベイランス小児科9定点を加えて10定点となった。今季のインフルエンザウイルスの札幌市における初分離は，1992年2月15日市内インフルエンザ調査内科定点のAソ連型であった。全国的にも長野県で1991年10月18日A香港型が検出されその後，1991年11月に鳥取県，12月横浜市でAソ連型のインフルエンザウイルスが検出された。札幌市では，1992年2月15日Aソ連型，3月4日A香港型を検出した。

今季はAソ連型を主流とし，少ないながらA香港型が混在しながら検出された。全国の調査対象施設における総患者数は昨年の53万人に対し27万人とほぼ半数であった[1]。

2．方　　法

2－1　ウイルス分離

インフルエンザ様疾患患者の咽頭めぐい液を，MDCK細胞に接種し，33℃で培養した。継代は2代まで実施した。

必要に応じ，一部の咽頭めぐい液に対しHeLa，KB等の細胞も使用した。

インフルエンザウイルスの同定には，日本インフルエンザセンター分与のフェレット感染抗血清を使用した。

分離ウイルスのHA試験，HI試験は，マイクロタイター法により実施した。

2－2　検査に使用した抗原・抗血清

A/Yamagata/32/89（H1N1）
A/Beijing/352/89（H3N2）
A/Shiga/2/91（H3N2）
B/Bangkok/163/90
B/Panama/45/90

3．結　　果

3－1　市内医療機関におけるインフルエンザ様疾患患者からのウイルス分離状況

1991年10月～1992年4月までの間に市内医療機関内科1定点から232検体，感染症サーベイランス小児科9定点から84検体，合計316検体の咽頭めぐい液を採取し，MDCK細胞によるインフルエンザウイルスの分離を試みた。

1991年10月～1992年1月までに採取した咽頭めぐい液からは，インフルエンザウイルスは分離されず，この期間分離されたウイルスはアデノウイルスのみであった。

1992年2月15日，市内インフルエンザ調査内科定点で2月4日採取した患者咽頭めぐい液1検体からインフルエンザウイルスAソ連型を分離した。その後，2月中，同型の分離が続いたが3月に入るとAソ連型は検出されなくなった。1992年3月4日，2月25日採取した患者咽頭めぐい液1検体からA香港型を検出した。2月上旬から中旬にかけてAソ連型が集中して検出されたが短期間に終焉し，2月下旬から3月上旬にかけては3株のA香港型を検出したのみであった。（図1）

*原田医院

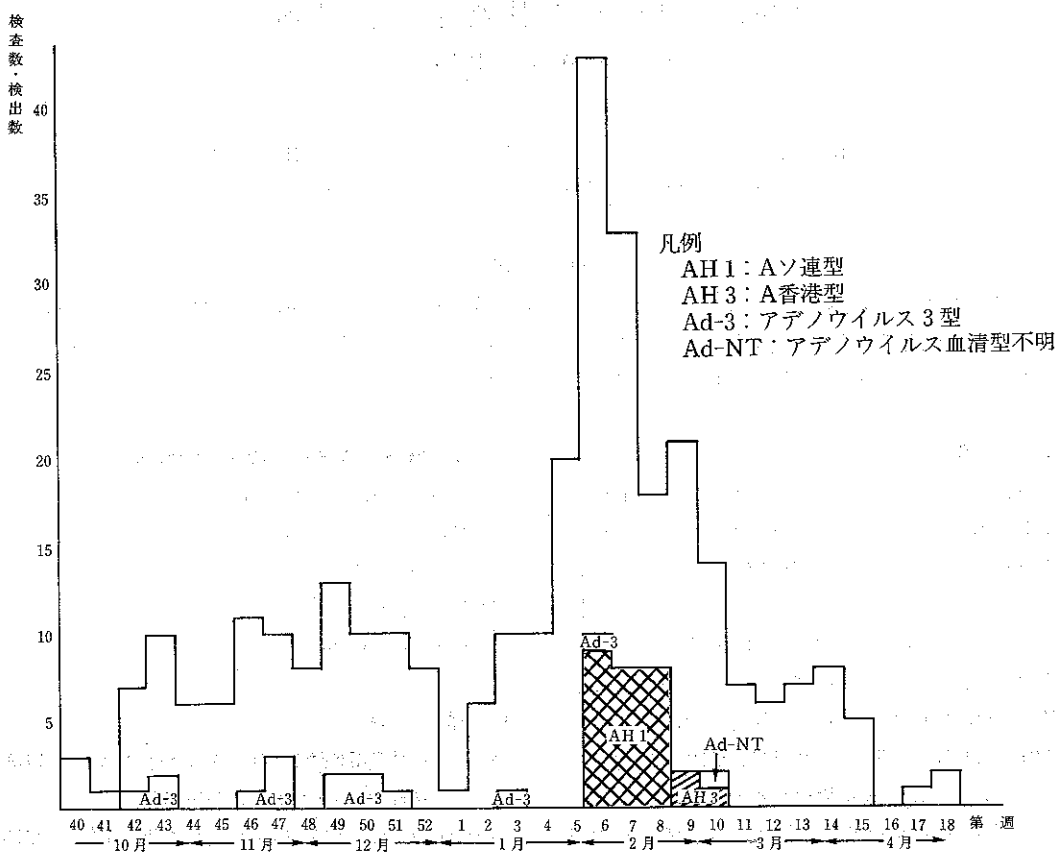

図1　週別検査数・検出ウイルス数

検体採取週別のウイルスの検出状況は，1991年10月～1992年1月に採取した咽頭ぬぐい液からはインフルエンザウイルスは分離されず，その間アデノウイルスが検出された。2月に入ってからはインフルエンザウイルスAソ連型が分離され，2月下旬までに，25株が分離された。3月にはいり，内科定点からインフルエンザウイルスA香港型3株が検出されたが小児科定点からはA香港型は検出されなかった。

市内医療機関におけるインフルエンザ様疾患患者からのウイルス分離は，316検体中Aソ連25（7.9%），A香港型3（0.9%）アデノウイルス15（4.7%）であった。

3－2　分離ウイルスの性状

1990/91シーズンに分離されたインフルエンザウイ

表1　1991－92　分離インフルエンザウイルス代表株の性状

抗　原	フエレット感染抗血清		
	A/Yamagata/32/89	A/Beijing/352/89	A/Shiga/2/91
A/Yamagata/32/89(H 1 N 1)	512	<32	<32
A/Beijing/352/89(H 3 N 2)	<32	1024	1024
A/Shiga/2/91(H 3 N 2)	<32	128	512
分離株			
A/札幌/3/92(MDCK－2)A(H 1)	512	<32	<32
A/札幌/301/92(MDCK－2)A(H 3)	<32	128	256

ルスの性状はAソ連型は標準株A/Yamagata/32/89(H1N1)に対し512, A香港型は,標準株A/Shiga/2/91 (H3N2) に対し256のHI価を示した。(表1)

4. 考　察

今季の札幌市におけるインフルエンザの流行は1992年2月に入ってからであった。昨シーズン(1990～1991年)にひき続き今シーズンも例年に無くインフルエンザの流行は遅く，全国的にその傾向は同様であった。

全国の調査対象施設における患者数は，一昨年のシーズン(1989～1990年)105万人，昨シーズン(1990～1991年)53万人に対し，今シーズン(1990～1992年)は27万人と減少傾向にあるが，来シーズンウイルスの抗原変異が大きいとインフルエンザの大流行も危惧される。

昨シーズン同様今シーズンもインフルエンザ様疾患患者からインフルエンザウイルスの分離がなされないため，アデノウイルスを対象とした発熱疾患原因ウイルスの分離を試みた。1990年10月～12月の期間小児科定点の患者のほぼ半数からアデノウイルス3型を検出した。

5. 結　語

札幌市における今季のインフルエンザの流行は昨年同様例年より遅く，19912年2月に入ってからであった。Aソ連型ウイルスが流行の主流となり短期間に終焉した。3月に入りA香港型が少ないながら分離された。この研究傾向は全国的に同様で，流行規模は比較的小さかった。

6. 文　献

1) インフルエンザ様疾患発生報告　第23報厚生省保健医療局結核・感染症対策室　平成4年4月20日

Epidemiological Studies on Influenza in Sapporo 1991-1992

Yasuhiro Yoshida, Maki Homma, Naomi Shimajiri, Masaru Harada*
Shigeru Ohmori, Yoshio Shimizu and Yuko Kikuchi

ABSTRACT

This year, like last year, influenza broke out slower than usual and it began to prevail in february 1991. The A(H1)-type virus was predominant and faded away after a short term.

In March, A(H3)-type virus was isolated even though it was a small amount. This tendency was common nationwide and the prevalence scale was relatively small.

*Harada Docter's Ottice